

## ペテロの手紙第2章1-11節 「主を知る成長」

### 1A 挨拶 1-2

### 2A 栄光と徳 3-4

### 3A 実を結ぶ者 5-9

### 4A 選びと召しの確証 10-11

#### 本文

ペテロの第二の手紙をこれから学んでいきます。私たちは、ペテロの第一の手紙を恵比寿バイブル・スタディで学びました。ペテロは、第二の手紙3章1節で、「この第二の手紙をあなたがたに書き送るのは」と言っているのです、明らかに第一の手紙の続きとして、同じ読者に語っているのだと思われます。第一の手紙で、ペテロは、おそらくパウロが殉教して間もない頃であったであろう時、パウロ自身も関わって来た小アジアの諸教会に対して書いていました。「バビロン(5:13)」とありましたが、おそらくローマから書き記していたと思われます。ペテロは、ローマで始まった皇帝ネロによる迫害が、小アジアにも間もなく及ぶに違いないことを悟って、それで手紙を書いたのでしょう。迫害を受け、苦しみを受けるキリスト者は、むしろその苦しみを受けることは榮譽あることであり、キリストの苦しみにあずかることなのだと思われました。そして、第二の手紙は、ペテロ自身も死刑になる直前に書かれています。「私がこの幕屋を脱ぎ捨てるのが間近に迫っているのを知っているからです。(1:14)」と言っています。

そしてペテロは、この第二の手紙を書き始めます。ペテロは第一の手紙においては、外から来る圧迫に対して、「自分自身を武装しなさい(1ペテロ 4:1)」と言いました。そしてペテロが第二の手紙を書いた時には、外からの苦しみ以上に、内から現れる「偽教師」の存在を教えているのです。私たちが戦うべき相手も、またその性質も外と内では変わります。自分たちの仲間から、偽の教え、人々を墮落せしめる教えを持ち込んでいるのが、とても厄介であります。そのために、どのように我が身を備えるべきなのかを教えているのが、第二の手紙です。それは、「神とキリストを知ること」であります。主ご自身を知ること、これが霊的成長となり、霊的成長によって、悪いものから守られるということです。

### 1A 挨拶 1-2

1 イエス・キリストのしもべであり使徒であるシモン・ペテロから、私たちの神であり救い主であるイエス・キリストの義によって私たちと同じ尊い信仰を受けた方々へ。

ペテロは、挨拶から始めています。自分のことを、使徒であると言っていますが、それ以前に、「イエス・キリストのしもべ」であると言っています。これは、ローマの下級奴隷ドューロスが使われ

ています。使徒は、遣わされた者ということですが、十二使徒にはイエス・キリストの全権が与えられています。しかし使徒たちは、どの使徒も、自分はイエス・キリストの下僕に過ぎないのだ、というところから始まっています。そして、使徒としての賜物を受け取っているとして、使徒であると言っています。ここに、主にある指導者の謙遜の姿を見ることができます。そして、彼は自分のことを、「シモン・ペテロ」と言っています。シモンは元々の、ヘブル語の名前です。ペテロは、主ご自身から名前が与えられ、石という意味で、ギリシヤ語です。ですからペテロは、ユダヤ人の使徒としてユダヤ人の信者を意識し、かつ異邦人の信者をも意識しています。

そして、ペテロはイエス・キリストご自身のことを、「神であり救い主」であると言っています。主ご自身を神だと言って、主ご自身が、「わたしは父と一つだ」と言われたところと一致しています。そして、私たちは自分たちの義ではなく、「イエス・キリストの義によって」といって、義が神の賜物であることを教えています。私たちは正しいということを聞く時に、何かを行なうことによって得られる義について考えます。けれども、それでは賜物ではありません。私たちは、神を信じ、キリストを信じる中で、その信仰が義と認められるのだということを、心によく留めていかないといけないでしょう。

そして、「私たちと同じ尊い信仰」と言っています。ペテロは、自分たちが受けたのと同じ信仰なのだ、共有しているのだということを強調しています。場所が離れていても、信仰は一つで、一つのキリストの体として交わりがあります。そして、ペテロは「尊い」という言葉が好きです。第一の手紙に、例えば、「傷もなく汚れもない小羊のようなキリストの、尊い血によったのです。(1:18)」とあります。私たちの受け取った賜物、信仰そのものがどれほど尊いことなのか、その感動をペテロはここに書いています。

2 神と私たちの主イエスを知ることによって、恵みと平安が、あなたがたの上にもますます豊かにされますように。

ここ挨拶において、「神と私たちの主イエスを知ること」という第二の手紙の中心的内容が書かれています。手紙の終わりは、「私たちの主である救い主であるイエス・キリストの恵みと知識において成長しなさい。(3:18)」とあります。ここでの知識というのは、また1章2節の知るというのは、知的なものではなく、人を知るというのと同じ、親密に知り合いになるという意味です。神を知り、イエス・キリストを知ることというのが、成長であるということです。第二の手紙では、人を世の汚れの中に巻き込んでいく偽教師たちが出てきたことを警鐘する内容に入りますが、主イエスを知ることが、いかにそれらの汚れから救われるのかを、ペテロは熱心に手紙の中で話しています。

そして、主を知ることによって、「恵みと平安」がありますが、それが、「ますます豊かにされますように」とあいさつしています。単に恵みと平安があるように、と祈ったのではなく、ますます豊かにされるように祈っています。つまり、再び霊的成長を取り扱っているのです。イエス・キリストに恵み

があります。けれども、イエス・キリストを知ることによって、ますます恵みに豊かにされます。使徒ヨハネは、「私たちはみな、この方の満ち満ちた豊かさの中から、恵みの上にさらに恵みを受けたのである。(1:16)」と言いました。そして、恵みが増し加われれば、さらに平安に満たされます。

## **2A 栄光と徳 3-4**

3 というのは、私たちをご自身の栄光と徳によってお召しになった方を私たちが知ったことによって、主イエスの、神としての御力は、いのちと敬虔に関するすべてのことを私たちに与えるからです。

私たちが、主の救いを受けた時に、それは召されたということです。主のものとして、呼ばれ、招き入れられたのですが、それは、神ご自身の「栄光と徳」によって召されました。神の栄光があります。そして神の徳、あるいは善と言ったらよいでしょう、それがあります。神が栄光の輝く方であり、かつ道徳においても善を有しておられる方だということです。その中に私たちは召されました。私たちは、いつまでも変わらないのだ。そのままのあなたでよいのだよ、と教える人々がいるでしょう、それは偽りだということです。私たちは、神の栄光と徳に召されたのです。そして、この方を私たちは知りました。親しく知ったということです。

そして、ペテロの私たちに対する励ましは、「神としての御力」が与えられているということです。私たちの力ではなく、神としての御力が私たちに与えられています。そして、その力は、「いのちと敬虔に関するすべてのこと」を与えと言います。私たちが確かに生きているということに、神の力が与えられます。もし罪の中に生きていたら、生きているとしても死んだも同然です。けれども、いのちに預かっています。それから、敬虔ということは、神を恐れ敬うことです。霊的な事柄をとても尊重していること、これが敬虔です。これらのものを、これらの中に生きることのできる力を、神が下さっているということです。

4 その栄光と徳によって、尊い、すばらしい約束が私たちに与えられました。それは、あなたがたが、その約束のゆえに、世にある欲のもたらす滅びを免れ、神のご性質にあずかる者となるためです。

ペテロは、第一の手紙で「尊い、すばらしい約束」について話しました。数々の、尊い、すばらしい約束がありましたが、例えば、「朽ちることも汚れることも、消えて行くこともない資産を受け継ぐようにしてくださいました。(1:4)」とあります。そして、それらの約束のゆえに、第二の手紙で強調されているのは、「世にある欲のもたらす滅びを免れ」たということです。偽教師というのは、再び心の定まらない人々を欲望の虜にしていくというものです。肉欲や好色によって、これらの教師が誘惑することが2章に書かれています。にわか信じがたいことですが、実際にあったからペテロは警告したのです。事実、教会の指導者と言われている者たちの中で、富が集まることが祝福され

ることなのだと言い、金の亡者となり、また女性問題でつまづく者たちは後を絶ちません。しかも、女性問題がありながら、それを正当化する教師たちがこれまでもいましたし、これからも出て来られるでしょう。ですから、ペテロはここで、「世にある欲のもたらす滅びを免れ」ることができるのだと強調しているのです。そして、「神のご性質にあずかる者となる」と強調しています。

### **3A 実を結ぶ者 5-9**

5 こういうわけですから、あなたがたは、あらゆる努力をして、信仰には徳を、徳には知識を、6 知識には自制を、自制には忍耐を、忍耐には敬虔を、7 敬虔には兄弟愛を、兄弟愛には愛を加えなさい。

私たちが神の救いを受けたというのは、以上、4 節にあるように、神の栄光と徳によって、神のご性質にあずかったということに他なりません。そして、キリスト者の特徴としては、「愛によって働く信仰(ガラテヤ 5:6)」が大事であるということです。与えられた信仰が、愛によって働くところまでの過程を、ペテロはしっかりと述べています。

初めに、「あらゆる努力をして」とあります。これは熱心になる、勤勉になるということです。私たちは、宙ぶらりんの姿で霊的に成長することはありません。熱心に、主から与えられた信仰を働かせるのです。これは、地道なプロセスです。ちょうど体力のために運動をするようなもので、霊的な鍛錬になります。パウロも、「古い人を脱ぎ捨て、新しい人を身につける」という言葉で説明しました。「エペソ 4:22-24 その教えとは、あなたがたの以前の生活について言うならば、人を欺く情欲によって滅びて行く古い人を脱ぎ捨てるべきこと、またあなたがたが心の霊において新しくされ、真理に基づく義と聖をもって神にかたどり造り出された、新しい人を身につけるべきことでした。」嘘も方便と嘘をつくのが当たり前の人が、真実を兄弟たちに語ります。怒りの問題がある人は、心優しくなります。噂話、悪口が大好きな人は、人の徳に役立つ言葉を話します。苦みのある人はそれを捨てて、人を赦します。

このようなことを聞くと、これまでの宗教的な修練とどのように違うのか？と思われるかもしれません。どう違うでしょうか？それは、単なる道徳的な鍛錬、修練は、古い性質によってそれを達成しようとします。けれども、キリスト者の鍛錬は、既に御霊が新しい性質に私たちを変えておられて、その新しい人に自分を合わせるということです。先に、「神としての御力」が与えられているとありました。すでに御霊によって、新しい性質が賜物として与えられています！けれども、古い性質が残存しているので、それが自分ではなく、既に新しくされているとみなして、神のかたちに形造られている新しい人を新たに習慣づけるのです。私たちは鍛錬というと、力まないといけないと思います。しかしむしろ、力んではいけないのです。野球のバットを振る時に、ゴルフのクラブを握る時に、その回転によって生じる力に体を委ねます。卓球のラケットを振る時に、腕は宙ぶらりんのようにして振ります。御霊の導きに、自分を任せることを学ぶのです。

本文に戻りますと、「信仰には徳を」と初めにあります。主を告白することが始まりです。けれども、それだけでとどまってははいけません。そこに「徳」すなわち、実を結ばせるような歩み、変えられた生活へと進むということです。「ヘブル 6:1 ですから、私たちは、キリストについての初歩の教えをあとにして、成熟を目ざして進もうではありませんか。」そこで、「徳には知識を」とあります。変えられた生活を歩むということは、イエス・キリストを知っていくこと、その知識が死活的です。主を知るところにこそ、真の徳があります。そして、「知識には自制を」とあります。知識を得れば高ぶるとコリント書第一にあります、しかし愛は徳を高めるとあります。このようなところに、自制が必要です。そして自制しながら知識を得ていく過程で、「忍耐」が加えられます。神ご自身が忍耐の神だからです。それから、「忍耐には敬虔を」とあります。ただ我慢するのではなく、その過程で、神をますます敬い、この方に近づきたい、恐れるようになります。そして、「敬虔には兄弟愛を」とあります。敬虔であるということは、自分自身だけの問題ではなく、人に向けられる愛となって現われなければいけません。そして、「兄弟愛には愛を」とあります。兄弟愛は感情のレベルのものであり、相互関係で成り立っていますが、そこからさらに一步踏み出て、霊的な深い愛へと昇華させます。

8 これらがあなたがたに備わり、ますます豊かになるなら、あなたがたは、私たちの主イエス・キリストを知る点で、役に立たない者とか、実を結ばない者になることはありません。9 これらを備えていない者は、近視眼であり、盲目であって、自分の以前の罪がきよめられたことを忘れてしまったのです。

「これらがあなたがたに備わり、ますます豊かになるなら」とペテロは強調しています。キリスト者には絶えず、前進という言葉があります。前進しなければ、後退してしまいます。私たちキリスト者は、「今の状態を保っていけば、現状維持をしていけばよいのだ」と考えます。ある人は、教会が熱心なので、あまりエネルギーを使わないようにエコで行こうという、わざとブレーキを自分でかけることをします。そうすると、どうなるかと言うとエコで終わらないのです。内側から、どんどん変わっていき、枯渇していきます。なぜなら、前進しないと後退してしまうからです。命というのは、流れて行きます。それ自体に命があるのではなく、動いているから命があります。血流がそうですね。血だけあっても、全く意味がありません。経済もお金が動かなければ死にます。全国民が全て筆筒貯金をしたら、経済は崩壊します。車が、上り坂でギアをニュートラルにしていたら、バックしてしまいます。上っているからこそ、生きることができます。

これらの神のご性質が備わっていけば、そして豊かになっていけば、そこに、「私はイエス様を知っています」と言っている中で、実を結ばない者にはならないということです。「役に立たない」というのは、キリスト者と言っても、キリストに似ていない、似せられていないということであれば、キリスト者と呼ばれても、全くその用を足していないということです。イエス様が弟子たちに、実を結ぶことと、役に立たなくなることについて、ぶどうの木から語られました。「ヨハネ 15:5-6 わたしはぶど

うの木で、あなたがたは枝です。人がわたしにとどまり、わたしもその人の中にとどまっているなら、そういう人は多くの実を結びます。わたしを離れては、あなたがたは何もすることができないからです。だれでも、もしわたしにとどまっていなければ、枝のように投げ捨てられて、枯れます。人々はそれを寄せ集めて火に投げ込むので、それは燃えてしまいます。」つまり、主を知っていくことこそが、後にペテロが警告する、内側から来る偽の教えから守られるのです。

そして、これらを備えていないと、「近視眼であり、盲目であって」とありますね。近視眼というのは、目の前のものしか見えないということです。自分が感じていること、目にしていること、目の前にあることしか見ておらず、主が後に与えられる栄光については度外視しているのです。そして、盲目でもあります。自分のしていることに気づいていません。分かっていません。そして、「自分の以前の罪がきよめられたことを忘れてしまった」とあります。これは悲劇です。自分が、キリストの流された血潮によって、御霊によって罪が洗われたのに、また同じ汚れの中に戻るということです。清められたのだから、清めの中にいるのが、主の御心です。

#### **4A 選びと召しの確証 10-11**

10 ですから、兄弟たちよ。ますます熱心に、あなたがたの召されたことと選ばれたこととを確かなものとしなさい。これらのことを行なっていれば、つまづくことなど決してありません。

兄弟たちよ、と、親愛を込めてペテロは話しています。これまでも熱心だったけれども、「ますます熱心に」と言っています。主は全ての良い行いを予め備えておられます。その備え、上からの力を、自分が熱心になることによって確かなものとすることができます。「あなたがたの召されたことと選ばれたこととを確かなものとしなさい」とペテロは言います。自分が召され、選ばれているということは、キリストにあって傷のない者になることです。「エペソ 1:4 すなわち、神は私たちが世界の基の置かれる前からキリストのうちに選び、御前で聖く、傷のない者にしようとされました。」キリストのうちに選ばれ、聖く、傷のない者にしようとされています。これを、私たちは天国に行く時に主が全てを行なわれるのだから、といて霊的に怠けていることは御心ではない、ということです。確かに召されて、確かに選ばれているのだということを、自分が主を知っていく中ではっきりさせていくということです。

そして、「つまづくことなど決してありません」とペテロは太鼓判を押しています。これらのことをやりながら、それで罪を犯すことはできないということです。ペテロは、否定的な部分ではなく、積極的なところに集中しなさいと教えているのです。つまずきであるとか、罪であるとか、そういったものに自分は巻き込まれてしまうのではないかという恐れが生じます。けれども、そうではなく、信仰には徳、徳には知識、知識には自制、自制には忍耐、忍耐には敬虔、敬虔には兄弟愛、兄弟愛には愛を付け加えていけば、つまずかせるものにつまづく暇さえありません。

11 このようにあなたがたは、私たちの主であり救い主であるイエス・キリストの永遠の御国にはいる恵みを豊かに加えられるのです。

召されている、選ばれているということは、イエス・キリストの永遠の御国の中に入るという約束があります。けれども、かろうじて入るのか、それとも豊かにされて入るのか、それは私たち次第といたことであります。パウロが、このことを火の中を通ることにより、真価が試されることを話しました。「1コリント 3:11-15 というのは、だれも、すでに据えられている土台のほかに、ほかの物を据えることはできないからです。その土台とはイエス・キリストです。もし、だれかがこの土台の上に、金、銀、宝石、木、草、わらなどで建てるなら、各人の働きは明瞭になります。その日がそれを明らかにするのです。というのは、その日は火とともに現われ、この火がその力で各人の働きの真価をためすからです。もしだれかの建てた建物が残れば、その人は報いを受けます。もしだれかの建てた建物が焼ければ、その人は損害を受けますが、自分自身は、火の中をくぐるようにして助かります。」

私たちは、単に御国に入るのではなく、その恵みを豊かにされるのです。それは、主を知っていく中で、そのご性質にあずかる中で、将来においても、恵みが、すなわち大きな相続が与えられるということです。タラントの喩えがありますね、五タラント受け取った者が五タラントもうけ、二タラントの人が二タラントもうけ、一タラントの人は地に隠しました。五タラント、二タラントのしもべが、「私はあなたにたくさんの物を任せよう。」と主人は言いました。このたくさんの物が、恵みが豊かに与えられるということです。かろうじて入ればよい、ということではないのです。

そして一章の後半から、ペテロは自身が見たイエス様の栄光を話し、それから預言の確かさについて話します。そして偽教師について、また彼らに対する裁きについて二章で話します。それから三章で、その預言がキリストの再臨を指し示していることを教えています。第一の手紙でもそうでした、ペテロは、キリストが戻られる希望を前面に出して話していました。そこにこそ、復活の希望があるし、また御国を受け継ぐ希望があります。そしてもちろん、世の汚れから免れる希望があります。ところが偽教師たちは再臨の希望などないと教えるのです。また、イエスが神ではないとも教えていたのかもしれませんが。神である救い主であるイエス・キリストとペテロは話しているので、イエスが神ではないという異端が入り込んでいたのでしょう。すべて、教えは他のいろいろなところに影響を与えます。キリストを知ることは、ゆえにとっても大切です。